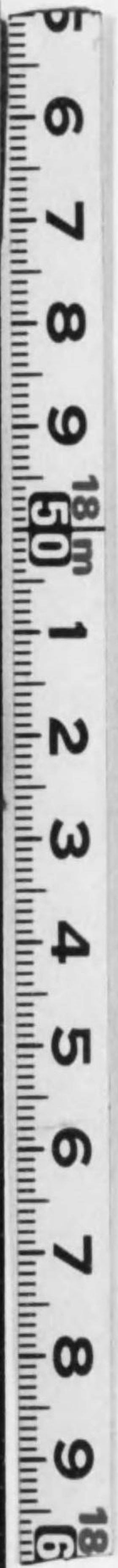




特 251
113

339
610

大倉集古館
余世子書



始



第 251
113

美術を

好む

美術を好む



美術を

好む

123

の

の

の

の

の

の



精純丸

九十二箱青洲





國賦

飛白之家孝子何准善務心
彩色老年遮莫憂世深
智年我回推枕起

昭如書畫

年流為



無佛
上人

公
養年



經王真在
款也宜至
完皆
蘇漢文



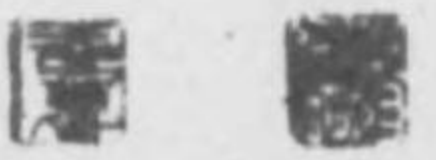
古眼毒干

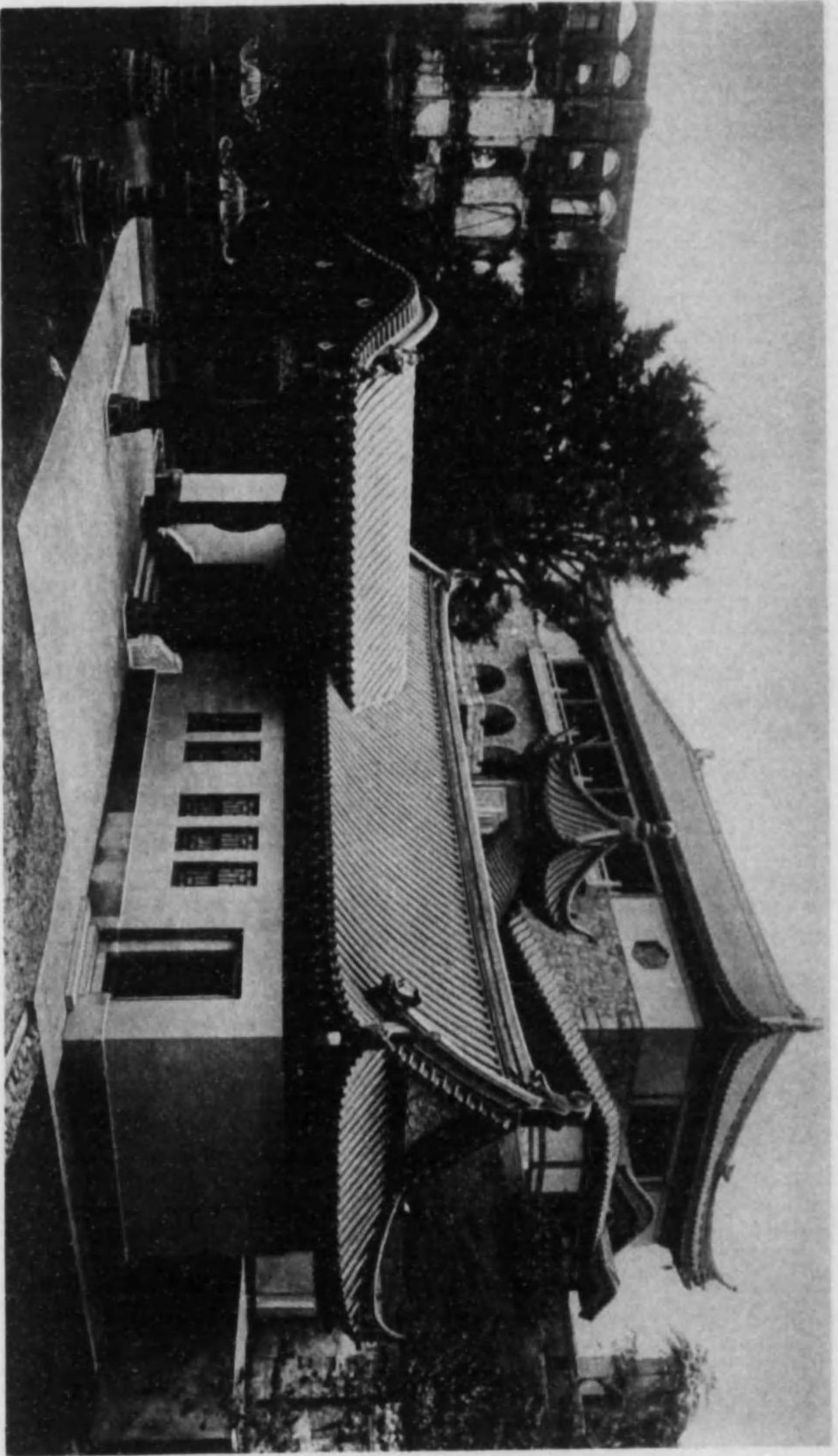
家信



怡 稽
神 古

德和 大倉 恭題

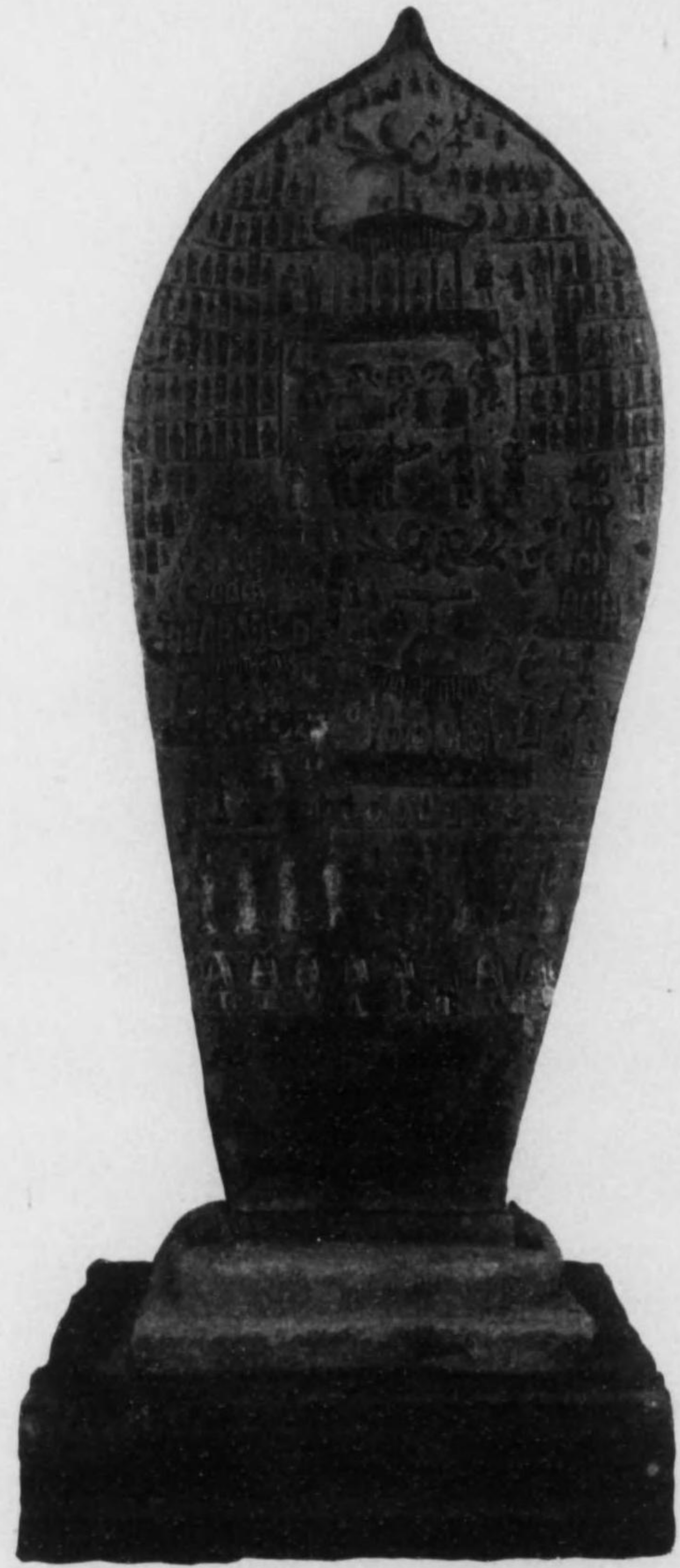




大倉集古館全景



期初代時朝六 (面正) 佛石大那支



支那大石佛(背)六朝時期初期

獅子石彫 支那三國時代

大正十二年大震火災の際火を冠り裂碎したるものを修理したるものなれども本圖は原型に依りたるものとす





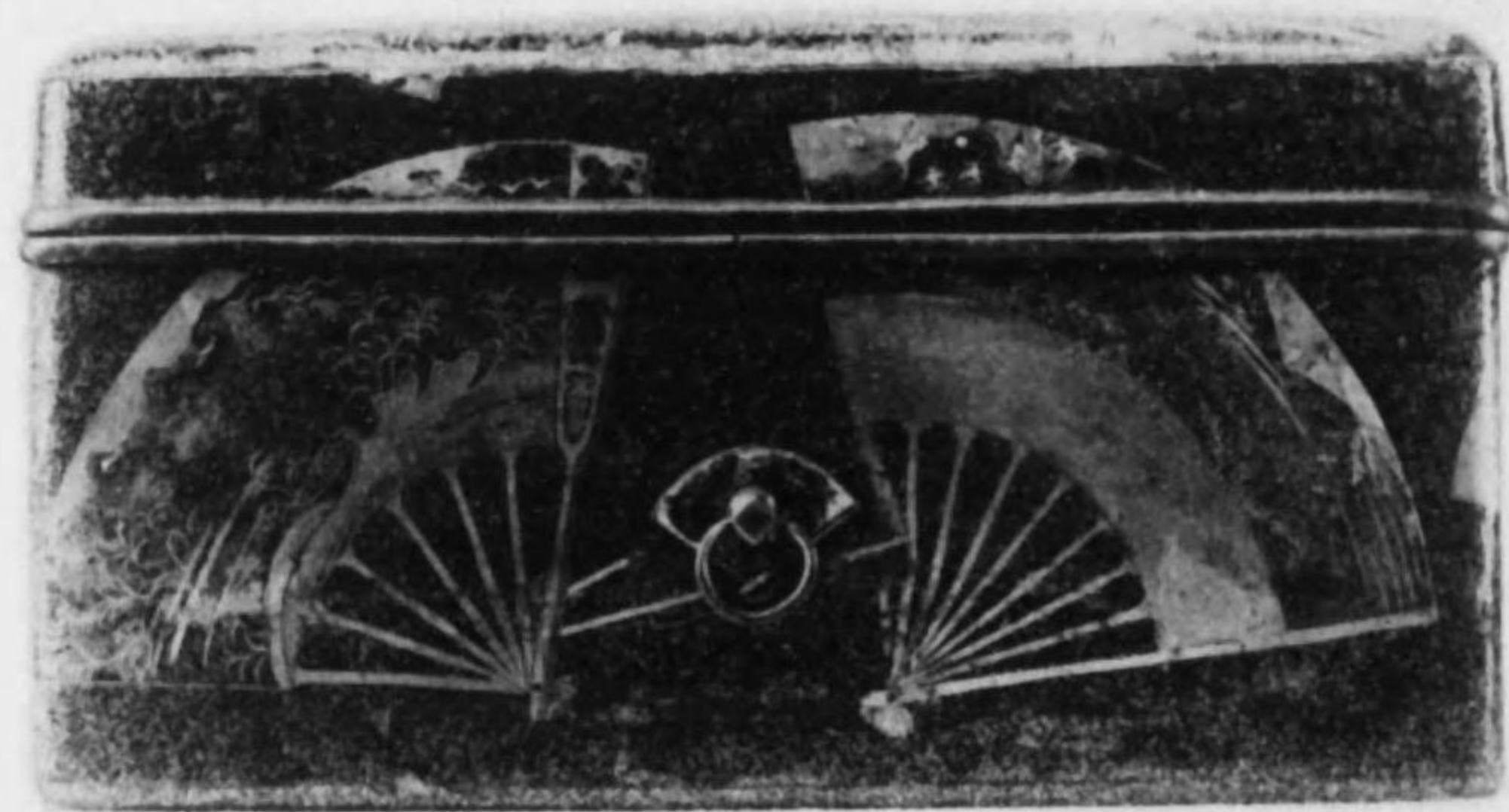
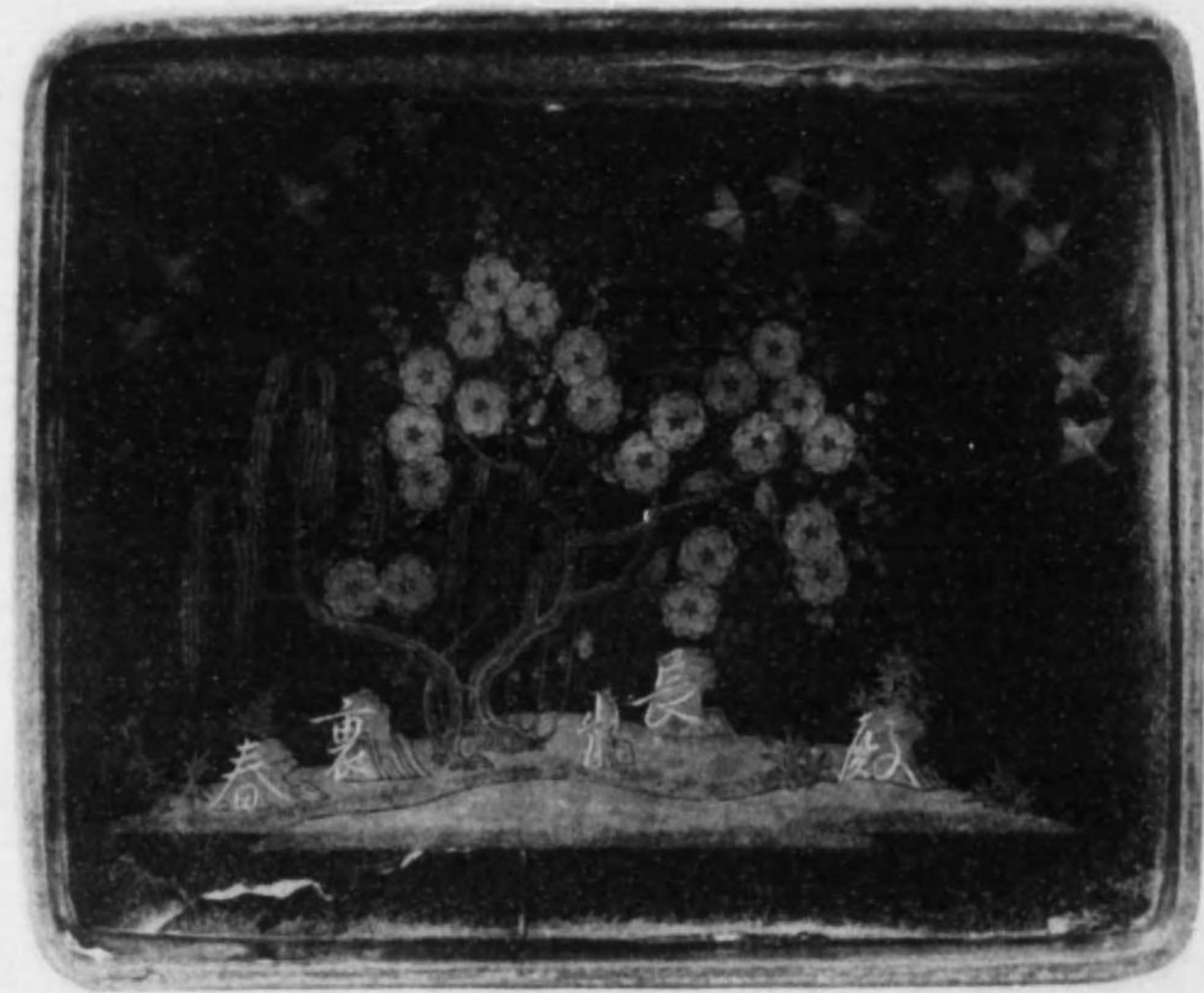
平安時代本
木彫普賢菩薩坐象像
(寶國)



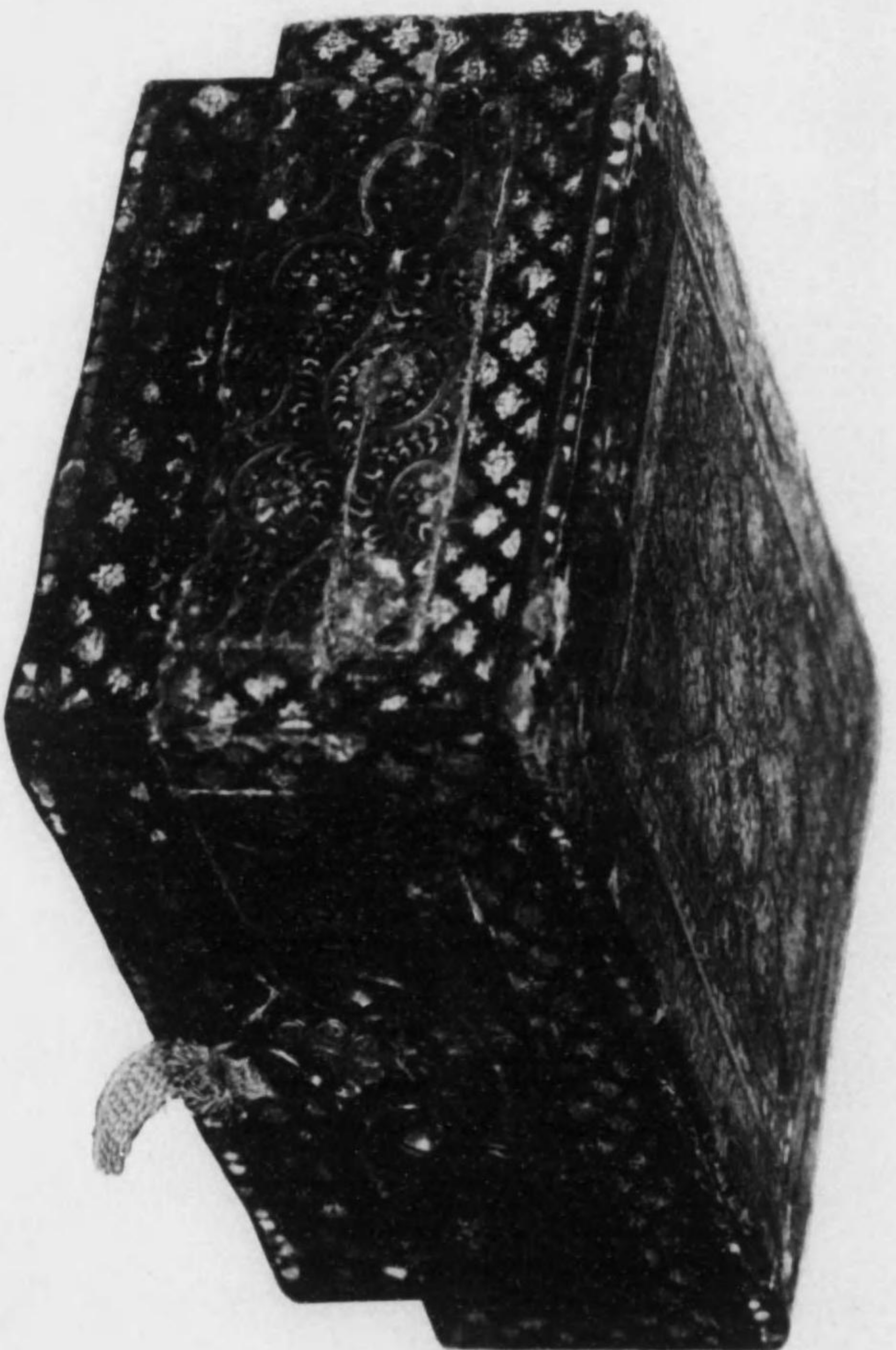
峯 雲 爲 泉 浴

圖 來 如 陀 彌 阿 越 山

彩 畫 本 絹 期 末 代 時 戶 江



代時金鐘 箱手繪蒔散扇



代時靈高銀器 箱 羅 伽 鈕 螺



(間年 蘇元) 代時 戸江 棚書 繪 蒔 高 水 山

也物しれらせ觀繪へ守濃美澤柳りよ公吉調軍將代五曰傳
 し横に形原をのもるたし失喪際のみ火雷大年二十正大は枚一右袋地
 すこのもるたし製作に新



第一節代時戶江 室德本紙 風屏圖流而扇 兼蓮宗村々野

劍 刀



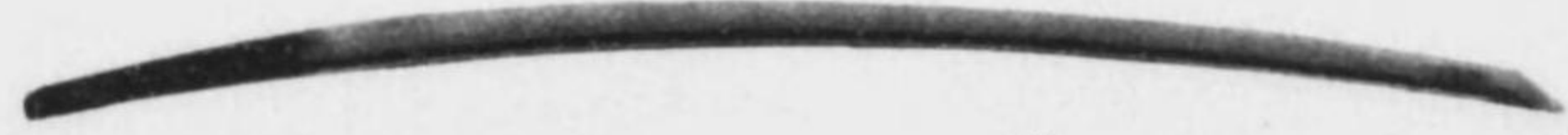
(寶國) 重 則^銘



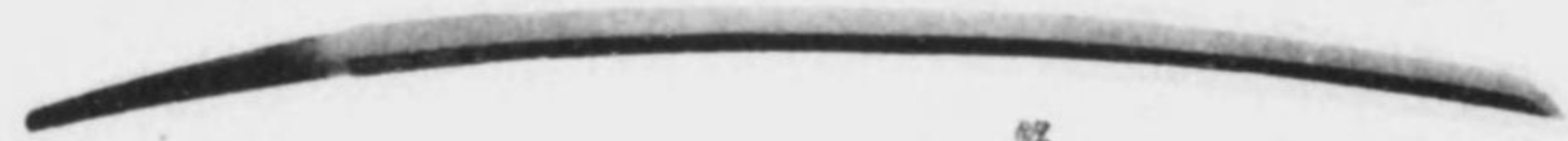
廣 秋^銘



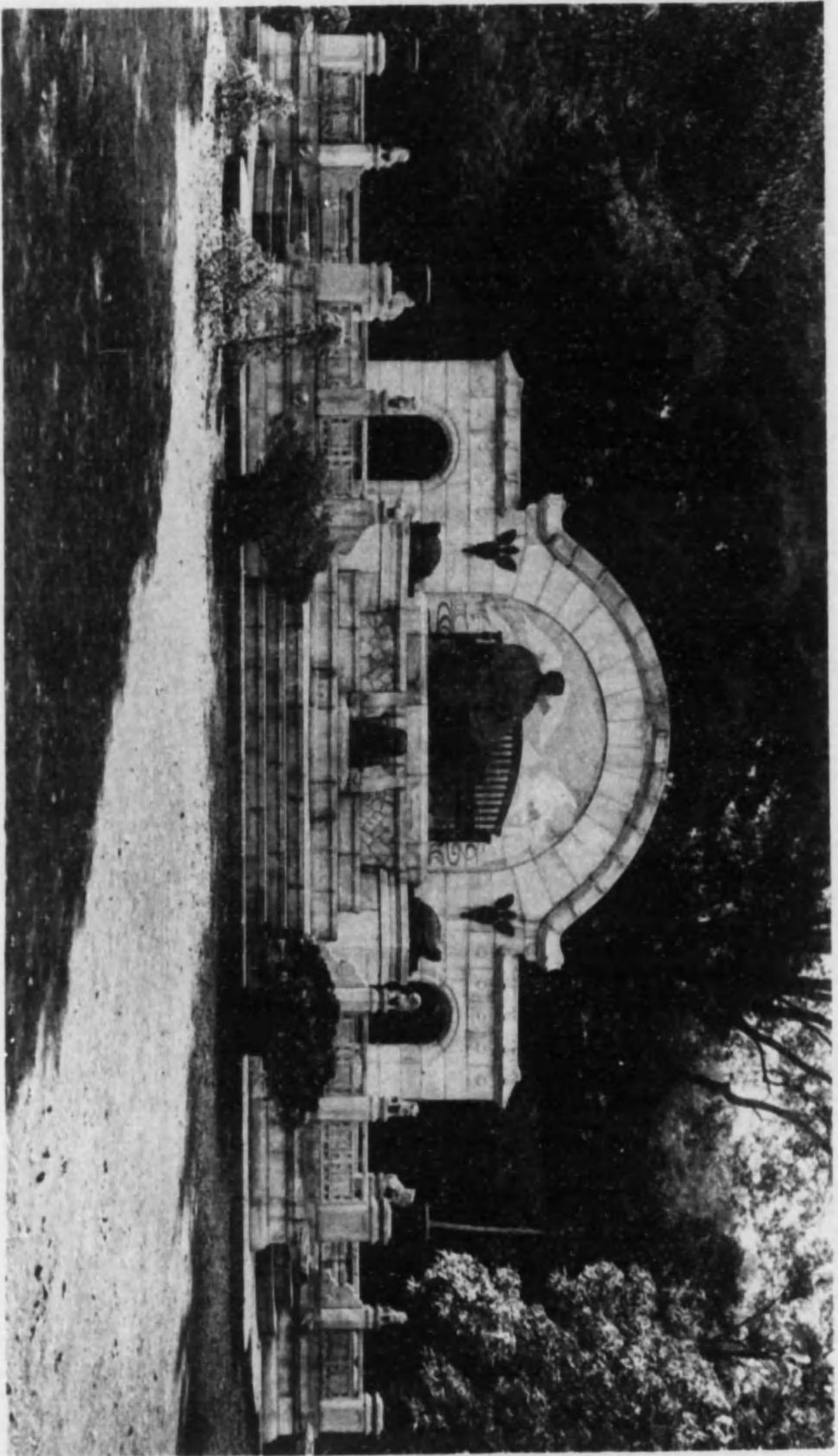
次 康^銘



成 友^銘



平 行^銘



此の銅像は翁の著書『長崎』を以て我國産業の發展と公共事業とに力を致されたる功績を記念
せんが爲に五十四年門下親友會の主唱により之を建置したるものにして原形は東京の巨匠武石弘三
郎氏の手に成るものなり銅像は彫刻して申洲三島鐵博士の撰文に成る大倉銅産業株式會社の銅あり

大 倉 鶴 彦 翁 銅 像

339-610

序

大倉集古館
長本

大倉集古館ハ土地家屋陳列品及ビ維持資金ヲ舉ゲ
 テ悉ク皆大倉男ノ特志寄附ニ成ル其價約千萬金ナリ
 余深ク男ノ志ニ感ズ委囑ニ依リテ同館理事ノ任ヲ擔
 當ス夫レ世上古器珍品ヲ愛玩スル者何ゾ限ラン然レ
 ドモ其之レヲ愛玩スルヤ多クハ虛榮ノ爲ニスルニ
 ラザレバ自個ノ利欲ヲ満足セシメントスルニアリ男
 ニ至リテハ頗ル其ノ撰ヲ異ニス本館列品ノ多クハ明
 治維新後制度文物變革ノ爲メ我邦古美術品ノ海外ニ
 輸出セララル、モノ多キヲ嘆キ男ノ購入セラレタルモ



ノ若クハ清朝末年ニ當リ北清團匪ノ亂アリ支那貴重
品ノ遠ク歐米ニ散佚セントスルヲ憂ヒテ之レヲ蒐集
セラレタルモノニシテ其他偶然男ノ耳目ニ入り一種
義俠ノ念ヲ以テ購入保存ヲ圖ラレタルモノ尠ナカラ
ズ而シテ之レヲ世ニ公開セントセラル、ニ當リ男ハ
斯道鑑識ニ富ムノ士ヲ聘シテ鑑別精選シ之レヲ學術
的ニ類別区分シ之レガ解説ヲ作り以テ參觀者ノ便ニ
供シ學術技藝ノ發達ニ資セントス男ノ志ヤ至レリト
云フベシ而シテ現在ノ集古館ハ元男爵ノ住宅ニシテ
大部分木造建築ナルヲ以テ他日腐朽ノ患アリ男ヤ實

ニ

ニ大ニ資ヲ投ジ之レヲ堅牢ナル美術陳列館ノ方式ニ
改造セントスルノ舉アリ男ノ美術保存獎勵ノ爲メ盡
ス所眞ニ厚シト云フベキナリ若シ夫レ集古館所在ノ
土地ハ古來江戸名所ノ一ニシテ館上望臺ヨリ眺ムル
トキハ東京全市殆ンド一望ノ中ニアリ其壯觀筆紙ノ
能ク盡ス所ニアラズ是レ亦帝都ノ珍品ナリ而シテ大
倉男ハ徒手身ヲ起シ勤勉努力一世ノ富豪トナリ廣ク
世界各地ニ店舗ヲ開キ我邦ノ商工業ヲ盛大ニシ名聲
宇内ニ赫々たり所謂ユル男ノ一身モ亦我邦ノ珍寶ナ
リ則チ男ト集古館ト館内列品ト共ニ後世ニ傳フベキ

三

モノナリ今ヤ本館列品要略編纂成ル依テ本館ニ關シ
余ノ所感ヲ述ベ以テ序言ニ代フ

大正九年六月

芳水 阪谷 芳 郎 識

大正十二年九月一日大震災ニヨリ本館并陳列品殆全部烏有ニ歸
シ其際搬出シテ幸ニ災厄ヲ免レタルモノ僅々ノ數ニ止ル故ニ此
序文ニ述ル所ト本館ノ現狀トハ頗ル相違スル所アルヲ免レサル
モ故鶴彦翁ノ甚大ノ篤志ヲ尊重記念スルカ爲修正ヲ加ヘス原文
ノ儘之ヲ存ス讀者之ヲ諒セヨ。(昭和七年三月追記)

大倉集古館要覽

沿 革

財團法人大倉集古館は大正六年八月の創設に係り、其土地、建物、陳列
品及維持資金を擧げて悉く故大倉鶴彦翁の特志寄附に成りたるもの
である。大倉鶴彦翁は、明治維新以前より實業に志し、七十年の長きに亘
つて我國産業の開發、海外貿易の進展に努力し、又東京、大阪、京城の三ヶ
所に商業學校を設立する等、社會公共の爲め盡瘁する所尠からざりし
が、大正四年十一月勳功により特に授爵の恩命を拜するに及び、翁は只
管に聖思の渥きに感激し報效の至誠黙止し難く、其の集藏に係る多數
の美術貴重品を擧げて、社會公共に寄附することを決意し、之が方法を
子爵石黒忠惠、故子爵澁澤榮一の兩氏に一任し、大正六年八月財團法人

大倉集古館の設立を見るに至つた、而して其寄附物件は左の通りである。

二

土地	四千八百貳拾四坪參合九勺七才
建築物	第一號館 煉瓦造 貳百九拾五坪六合九勺
	第二號館 木造 二百四拾九坪一勺
	第三號館 煉瓦造 參百拾壹坪壹勺
	朝鮮館 木造 參拾九坪
	附屬建物 百六拾九坪
	土塀並煉瓦塀 六拾六間
陳列品	參千六百九拾貳點
美術品	壹萬五千六百冊
書籍	金五拾萬圓
維持資金	

就中陳列品は、翁が過去五十年間に涉り苦心慘憺して蒐集、蓄積したるもので、遠くは明治維新當時より我國文物制度の變革に際會し國寶たる可き我が古美術品が海外に搬出せらるゝを憂ひ、若は又清朝の末期同國團匪の亂と共に其の珍什佳寶が均しく歐米に散逸せんとするを防止する爲め、巨資を投じて之を購入したるものが其の大部分を占めて居る、此の意義ある動機により蒐められた美術品は

一、諸佛教國民の手に成れる各種の佛教式彫像及支那の道教式彫像

二、我國の詩繪品

三、支那の推朱器

四、支那の壙埴陶俑並に石佛及古銅器

等にして、就中支那推朱器は其の量に於て、其の質に於て世界に冠たる

三

ものと稱せられた。又豊太閤桃山の御殿は、人も知る當時美術の精粹を萃めたるものであつたが、其の一部が翁の手に依つて保存され残つて居たのを集古館に收め、舊時諸侯伯城中對面の上段の間を造成し、桃山時代の絢爛たる藝術を窺ふことを得しめた。又徳川五代將軍綱吉の生母桂昌院尼の靈廟の一部を移したが、頗る莊嚴を極めたものであつた。然るに端なくも大正十二年九月一日の大震火災の襲ふ所となり、完全なる防火設備を有したる本館も、水道幹線の斷水に依つて如何とも爲すことを得ず、遂に各館共火災の厄に遭ひ、如上幾多の貴重品を烏有に歸したることは、實に東洋美術の一大損失にして惜しみても尙餘りあることである。

唯不幸中の幸とも云ふべきは、列品中左記の品は、或るものは倉庫内に在りて災厄を免れ、或るものは猛火の裡を辛ふじて搬出し得たるも

ので、是れこそ實に本館復興の基礎を爲したるものである。

- 一、支那三國時代石彫獅子
- 一、支那墓誌石
- 一、支那壙埶
- 一、支那元時代青磁砮手香爐
- 一、平安時代木彫普賢菩薩象坐像
- 一、鎌倉時代木彫法蓮上人坐像
- 一、鎌倉時代扇散蒔繪手箱
- 一、朝鮮高麗時代螺鈿伽羅箱
- 一、江戸時代山水高蒔繪書棚
- 一、同 山水高蒔繪文臺硯箱
- 一、同 山水高蒔繪料紙硯箱

- 一、宗達筆扇面流圖屏風
- 一、探幽筆鶴飼圖屏風
- 一、十六羅漢圖
- 一、十二天圖
- 一、爲恭筆山越阿彌陀如來並に曼荼羅圖
- 一、安信筆三幅、中文殊左右花鳥圖
- 一、常信筆三幅、中文殊左右雲龍竹虎圖
- 一、刀劍類
- 一、宋元明槩及舊鈔本各種
- 一、淨瑠璃本各種

右の内平安時代木彫普賢菩薩象坐像及刀劍類の内銘則重短刀は昭和六年一月國寶に指定せられた。

復興と建築概要

故大倉鶴彦翁は、集古館の建物及陳列品の焼失したることを深くも惜しみ直ちに之を復興せんと決意せられて、新に金貳拾萬圓を再建築資金として寄附せられた、是に於て本館は其の寄附に加へて金五萬圓を支出し、工學博士伊東忠太氏に建築設計を又大倉土木株式會社に工事施行方を委嘱し、大正十五年三月工を起し一年有半を経て昭和二年八月竣工、昭和三年十月開館するに至つたのであつて、其の建築概要は左の通りである。

構造は全部鐵筋コンクリート造、屋根は鐵骨銅葺である、窓は鋼鐵製、本館には完全なる防火扉を備へた。

この建築の様式は「支那風」である、色彩の強烈なる對比、屋根飾りの異

様なる動物、室内裝飾の怪奇なる味ひ等皆この「支那風」の現はれである、建築の配置は、崖上の本館、崖下の別館、これを連ねる廊下と六角堂とより成るものであるが、其の形本館は重厚に、別館は奇巧に、其の間の六角堂は輕快の趣を、持して兩館の連鎖をなして居る。

本館は奇棟造、二階建外部の腰約二十尺の高さまで、伊豆石「六ヶ村」の亂石積である、軒の四隅には怪鬼の軀から風鐸が吊り下げられて居る、種は繁種にして軒隅の反りは激しい、室内階下陳列品は簞潔素朴なる石造の趣をとゞめ階上陳列品は温和なる木造的色彩と、天上、持送り等の支那式怪奇の彫塑との不思議なる調和を示して居る、階段室の勾欄には黄龍石の小狗をきざむであり、廊下に出づれば藻井、朱楹飽く迄華麗、黄龍石を刻みたる勾欄を越して遙かに大東京を一眸の中に瞰下することが出来る、本館の延坪貳百五拾貳坪である。

別館は入母屋造、車寄は全部朱色、持送り懸魚等の青銅色はよくこれに調和し且つ正面墓股には一對の獅子を配した、車寄に連らなる玄關廣間は折上げ組天井、極彩色で、此建坪は參拾七坪六合である。

六角堂はその屋根の形、極めて異様で、下り棟は激しく跳ね上つて、鳳凰の首となる、室内の彩色は原色のあざやかな交錯で頗る異彩を放つて居る、床は支那風モサイツク、黒大理石の篆字は十二支を示し方位を現はして居る、此建坪は六角堂、附屬守衛室、廊下及便所を併せて參拾七坪六合である。

附記

大震火災當時、舊第二號館は木造であつた爲め跡かたもなく焼失したが、舊第一號館及舊第三號館は、煉瓦造であつたが爲め其の外壁は

残存した、大倉鶴彦翁は震火災の惨害が如何に劇烈なりしかを後世に傳へ、當年の惨害を偲ひ併せて研究資料に供せしむる爲め、之を現狀の儘保存することを發意せられ、特に政府當局の承認を得て保強工事を施し之を保存することゝした、新築本館の左右に在るものが則ち夫である。

陳 列 品

陳列品の重なるものは概略左の通りであるが、之は逐次充實して其の完整を期する方針である。

一 階

- 一、支那周時代 鐘
- 一、同 秦時代 權
- 一、同 量
- 一、同 漢時代 畫像石
- 一、同 三國時代石彫獅子
- 一、同 六朝時代大石佛
- 一、同 晋時代 墓碑石

- 一、支那唐時代 藏墓石
- 一、同 各時代 墓誌石
- 一、同 曠 埽
- 一、同 瓦當片
- 一、同 錢 范
- 一、暹羅金銅涅槃像木造施箔牀付
- 一、同 釋迦如來立像
- 一、西藏青銅漆箔普賢菩薩象坐像
- 一、西藏金銅閻曼德迦威怒王立像
- 一、西藏金銅最勝金剛明王立像
- 一、木彫金剛力士

二 階

- 一、平安時代 木彫普賢菩薩象坐像 (國寶)
- 一、鎌倉時代 木彫法蓮上人坐像
- 一、同 木彫大黒天
- 一、同 扇散蒔繪手箱
- 一、同 蒔繪香箱
- 一、朝鮮高麗時代 螺鈿伽羅箱
- 一、支那元時代 青磁砧手香爐
- 一、江戸時代 山水高蒔繪書棚
- 一、同 山水高蒔繪文臺硯箱
- 一、同 料紙硯箱
- 一、桃山時代 網代に葡萄圖屏風

- 一、桃山時代 籬に葡萄圖屏風
- 一、同 櫻圖屏風
- 一、同 千鳥圖屏風
- 一、宗達筆扇面流圖屏風
- 一、探幽筆鶉飼圖屏風
- 一、安信筆橋畔蓮蘆圖屏風
- 一、守景筆賀茂宇治景圖屏風
- 一、長龜筆上野兩國行樂圖屏風
- 一、應舉筆雁圖屏風
- 一、椿山筆蘭に竹圖屏風
- 一、佛涅槃圖
- 一、十六羅漢圖

- 一、十二天圖
- 一、普賢十羅刹圖
- 一、般若十六善神像
- 一、爲恭筆山越阿彌陀如來并に曼荼羅圖
- 一、雪舟筆書蹟
- 一、雪村筆鷺圖
- 一、探幽筆三幅、中文殊菩薩左右雲龍竹虎圖
- 一、同 三幅、中呂洞賓左右櫻に馬紅葉に牛圖
- 一、安信筆三幅、中文殊左右花鳥圖
- 一、同 三幅、中黃山谷左右山水圖
- 一、同 四幅、四季山水圖
- 一、常信筆雙幅、梅に尾長鳥柳に黃鳥圖

- 一、常信筆雙幅、松に琴紅葉に琵琶圖
- 一、同 三幅、梅に鶯圖
- 一、北齋筆鐘馗像
- 一、朝鮮李朝時代 阿彌陀如來像
- 一、同 群禽圖
- 一、支那明時代雙幅、夏景雪景山水圖
- 一、同 山水漁夫圖
- 一、同 清時代 王元章筆梅圖
- 一、室町時代 融通念佛緣起卷物
- 一、探幽縮圖卷物 二卷五帖
- 一、大黒長左衛門筆文昌物語卷物
- 一、一蝶筆雜畫卷物

- 一、支那清時代 婦女圖卷物
- 一、同 憚南田筆花果圖
- 一、能面及裝束并に小道具
- 一、刀劍類 内短刀 銘則重 (國寶)
- 一、日本古銅鐵製佛像及土器
- 一、朝鮮古銅陶器
- 一、支那古銅及陶俑
- 一、宗元明槩及舊鈔本各種
- 一、淨瑠璃本各種

庭 内

- 一、 青銅釋迦如來坐像
- 一、 銅造金箔地藏菩薩半跏像
- 一、 青銅鐘
- 一、 銅燈臺
- 一、 銅製大香爐
- 一、 朝鮮高麗時代五重石塔婆
- 一、 支那交趾窰塔
- 一、 大倉鶴彦翁銅像

職 員

評 議 員

	文學博士	男	男	子	
		爵	爵	爵	
	大 幸	德 門	大 倉	大 馬	阪 石
	倉 田	富 野	倉 喜	越 恭	谷 芳
一九	喜 成	猪 一	重 九	糸 恭	黑 忠
	六 郎	行 郎	郎 郎	馬 平	郎 憲

理事

男 爵 阪 谷 芳 郎

男 爵 大 倉 喜 七 郎

大 倉 彖 馬

監事

大 橋 新 太 郎

本 宿 家 全

館長

橋 本 鐵 男

觀 覽 規 則

- 一、本館ノ觀覽日時及休館日左ノ如シ
 - 一、自四月一日午前九時ヨリ午後四時マデ
 - 一、自九月三十日午前九時ヨリ午後四時マデ
 - 一、自十月一日午前九時ヨリ午後三時マデ
- 二、觀覽無料トス
- 三、觀覽者ハ入門ノ際在館票ヲ求メ出門ノ際之ヲ返還セラルベシ
- 四、靴又ハ上草履ヲ穿ツ者ニ非ザレハ館内ニ入ルヲ得ズ
 - 但靴ヲ穿ツ者ト雖モ都合ニヨリ上履ヲ着ケシムルコトアルベシ
- 五、酩酊者若クハ忌ムヘキ病者其他他人ノ妨害トナルヘキ者ハ入門及觀覽ヲ拒絕ス
- 六、左記ノ所爲ハ之ヲ禁止ス
 - 一、畜類ヲ携伴スルコト
 - 一、館内ニ於テ喫煙スルコト
 - 一、陳列品ニ手ヲ觸ル、コト
 - 一、庭園内通路ノ外ニ踏ミ入り又ハ樹木花卉等ヲ採折スルコト
- 七、杖、傘其他嵩バリタル携帶品ハ入場ノ際係員ニ預ケラルベシ

東京市赤坂區葵町三番地

財團 法人 大 倉 集 古 館

電話赤坂七四〇番

終

